言の葉～込められた想い～

灯月樹青

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
言の葉～込められた想い～

【Ｎコード】
Ｎ５７０３Ｂ

【作者名】
灯月樹青

【あらすじ】
「もう恋はしない」――そう思ってた…あんな辛い思いをするぐらいなら恋なんてしたくない…と。自分の気持ちに気付いても、どうしても踏み出すことが出来ない。あなたと出会ったのに…。そんな思いを抱く恋愛模様を描いた小説です。２００７／０９／０４：一身上の都合により続きを書く余裕がない為完結とさせて頂きます。

第1話　プロローグ

「今彼氏いないって言ってたじゃん、ね？お願いっ！」
パンと軽快な音を立てて掌を合わせるのはかなり幼く見えるがタメで同期の月島郁恵（ツキシマイクエ）だ。
「そう言われても…興味ないってか今は…そういう気分になれないんだって」
「男の傷は男で癒せばいいじゃんっ！」
「……」
どうしても引く気を見せないこの子に、どう言えば諦めて貰えるんだろうか。
そんな事を真剣に考えながら、食べかけのお弁当を見る。
この社内では珍しい自作のお弁当。
「お願い奈緒っ！私の顔を立てると思ってっ！」
深々と頭を下げては上目使いで見上げる仕種をする郁恵に、私が勝てた試しはない。
この子はこう見えてかなり押しが強いのもその要因かもしれない。
「……行くだけだからね」
「ありがとぉ～！！」
渋々参加する事だけ了承すると、郁恵はもうこれ以上はないってぐらいの満面の笑みを浮かべる。
小さいことでも素直に顔に出る彼女は、奈美のコンプレックスの対象だった。
まだ新しい傷が――痛む。
それを感じ、奈美は気を紛らわせる為にまだ終わらない書類の作成に集中しはじめた。

第2話　浮いた二人

「皆彼氏いないなんて信じらんないよなぁ」
「本当に彼女いないんですかぁ？」
「レベルたけぇ～♪」
オチャラケなのかなんなのかわからないが、場は盛り上がっていた。
予想していたよりもレベルの高い男側に女側も張り切っているし、
郁恵が綺麗めな女を集めているだけあって男受けもいいようだ。
その場に全く馴染んでないのが、私――――と、奏司（ソウジ）と名乗った男だけだった。

「奏司さんっておいくつなんですか？」
「……２４」

ボソッとという表現がよく似合う。
本当にそんな感じだった

「おら奏司っ…！ちょっとは愛想よくしろょ…！」
「……人数足りないってから来ただけだから」
（うっわぁ～。それ今言うか！？）

至極真っ当な諌めの言葉もどこへやら。
マイペースというかなんというか…。
勿論そんな事言われて女性陣が絡める訳はなく。
結果浮く人間が二人いると言うことだ。

（人数合わせ……って事は…）

意を決して静かに酒を飲んでいる奏司さんに向き直る。

「ねぇ奏司さん。二人で抜けません？」
「……ぁ？」

予想通り、かなり嫌そうに目を細める。
しかしここで引き下がるわけにはいかず。

「人数合わせに来たって言ってたでしょ？って事は二人で抜ければいいんですよね？」

『抜ける』というのを強調していうと、なんの事だか相手も悟ったらしい。

「いいぜ。ヒロ俺抜けるわ」
「え？おぃっ！奏！」
「郁恵～♪私も一緒に抜けるねぇ～」
「ぇ？奈美」

幹事を任されてる二人は明らかに動揺する。

「じゃお先にぃ～」

片手をヒラヒラさせながら二人して個室を出る。
外の空気はひんやりと冷たく澄んでいる。

「ゴメンね♪助かっちゃった☆抜けたかったからさ」
「お互い様だな。俺の方も助かったよ」

さっきまではよっぽど機嫌が悪かったらしい。
話しにくいかと思ったのが嘘のようだ。

「んじゃ……」
「あ～この後予定とかあんの？」
「ぇ？」
「飲み直しにいかね？」

思ってもいなかった言葉に目が点になるとはこういう事をいうのだろう。

「ぷっ（笑）んなに意外か？」

よっぽど顔に出ていたんだろう。
もの珍しそうに覗き込まれる。

「まぁ確かにさっきまでかなり不機嫌だったしなぁ」
「…」
「あ～もしかして怖がらせた？こっちが地だよ」

さっきと同じ人だろうか。
コロコロと変わる表情に親しげな笑顔。
それに――よく喋る。

「ぉ～い、颯さ～ん？」
「あれ？苗字…言ったっけ？」
「いゃ？でも誰かに呼ばれてたでしょ？」

確かに仲のいい子ばかりではなかったから苗字でも呼ばれてたけど…。

「…気のないふりしてたの？」

「いゃ、気なんかなかったよ。ま、それでも気になるでしょ。自分と同じで浮いてる子いたら――さ」
「まぁ…確かに……」
どう考えたって目立ってただろうし。
「じゃ決まりな♪」
そういうと、さっき見せていれば確実に何人かは落ちたであろう魅力的な笑みを浮かべる。
そんな奏司を素直にカッコイイと思ってる自分に、奈美は気付かれないように苦笑を浮かべた。

第3話　酒豪

「へぇ～んなことあったんだ？」
「そうなのっ！信じられなくない！？わざわざんなこと言いに来る！？」
「ひっでー、ありえないってっ！」
「でっしょー！！」

数時間後。
奏司おすすめの居酒屋にきて数時間。
二人はすっかり出来上がっていた。
二人とも普段なら酒に飲まれる質ではないのだが…、どちらも同じような酒豪の為に、杯を運ぶ手が止まることはなく…この調子である。
しかも二人とも好きなものは日本酒と来ている。
二人で二升は空けただろうか。
生憎と男女で飲みに来た二人に店員が気を利かせ、個室に案内しているため、その飲みっぷりに舌を巻く観客はいないが…。

「別れて正解だって！んな男っ！」
「だよねっ！ぅんっ！！」
「よ～しっ！奈美の門出に乾杯～」
「乾杯～」

気分よく祝杯をあげる二人だが、一体何回乾杯したのか二人とも記憶には残ってないだろう。
ちなみに今のが記念すべき１０回目になる。

「奈美付き合い安いな♪言いたいことはいうし」

些細な。
とてもありきたりな一言だった。
奏司としては褒め言葉であった言葉だが、それを聞いた奈美は見る間に表情を硬くした。
まるで冷水でも浴びせられたかのように…。

「奈美？」
「――私…、…そんなに女らしくないかなぁ」

その声は今までと違い、――何処か泣きそうな…けれど精一杯耐えている――という感じだった。
その変わりように動揺し、奏司は酔いが覚めたかのように頭がスゥーっとなるのを感じた。
――『さっきまでとは違う』――
それは肌に感じる空気からも読みとれる。
多分奈美はまだ酔っている。
その目は焦点を結ぶ事なくさ迷っているから。

「――奈美…？」
「…振られた時に言われたんだ…」

呼び掛けた声も、奈美には届いてないかのよう――。
声が届いてないと判断すると、奏司はもう呼び掛けはしなかった。
過去に。
似たような感じになった奴を知っているから。

「――男と付き合う趣味はねぇ…って」
「…！」

瞬間的に頭に血が上る。
二の句が言えなかった。
まさかそんなことを言われてるとは思ってもみなかったから。
もちろん怒りの矛先はそれを言った男に対してなのだが。

「あいつから告って来た癖にねぇ。それでね。もう一つ言われたの」

いい話ではないだろうと直感的に悟る。

「私のね、親友と付き合うことになったんだって…。親友はね、ちっちゃくて、可愛くて…私と正反対――本当に理想の子って感じなんだって…。私…何だったんだろうね…」

気持ちが手に取るようにわかるのは、失恋したばかりだからだろうか。
短い付き合いではあるが、そうやって嘆く様は何処から見ても女だというのに…相手の男は気付かなかったのだろうか。
確かに容姿に女の子という感じはない。
タッパがあるために可愛いらしいという単語は当て嵌まらないし、しおらしいとも思えない。
けれどそれは可愛いが当て嵌まらないというだけだ。
代わりに当て嵌める言葉は『綺麗』だろう。
肌は綺麗だし、髪は短いが傷みは感じられない。
行動にしたって、細かい気配りをさりげなくしているのは、その辺りの女より女らしいと思う。

「――…？奏司？」

――ほぼ無意識だった。
奈美を抱きしめたのは。

接触によって我に返ったんだろう奈美が、不思議そうに間近にある俺の顔を見上げる。

「奈美？」

「ん？」

呼び掛ければ返ってくる。

それがとても愛しく感じて。

見上げてくる表情がキョトンとしていて、先程自分で否定していながら可愛く思えて――。

奏司は触れるだけの――キス――をした。

第４話　二日酔いの朝に

ズキズキとまるで頭の中で小人でも騒いでいるんじゃないかと思うぐらいに頭が痛い…。
完全に飲み過ぎたなぁ。

「奈美〜！！」

甲高い声が余計に脳髄を刺激する。

「……おはよ」
「？体調悪いの？」
「……ただの二日酔い」
「あのあと飲みに行ったの！？」
「…そ」

頭痛のせいであんまり話したい気分ではないので、郁恵には悪いけど適当にあしらう。

「マヂで！？」

――ったつもりだったがどうやら逆効果だったらしい。
キラキラと光る目をこちらに向けている郁恵。
二日酔いの今の状況で相手にしたいとは思えない。
そう思った矢先、ポケットにいれてあった携帯が最近話題の曲を奏で始める。

「あ、やばい」

マナーにするのをすっかり忘れていた。
普段ほとんど鳴る事のないそれはここぞとばかりに自己主張を続ける。
小さな画面には知らない番号が表示されていた。
けれどあまり考える事なく通話ボタンを押した。

「…もしもし？」
「その声だと二日酔いか（笑）」
不機嫌そうな声に応じた相手の声に、奈美には心辺りがあった。

「わかる？奏司だけど」

それは昨日初めて会って飲みに行った人の名前。

「びっくりした…ってか教えたっけ？」
「あ～悪い。勝手にワンギリさせてもらった」
「そ。別にいいよ」

特に不快感はなかった。
あれだけ対等に飲めた相手も久しぶりだし、何より一緒にいて楽しかったから。

「サンキュ」
「んで？そっちもそろそろ仕事っしょ？」

時計を見るとそろそろ始業の時間だ。

「あぁ」
「私なんか忘れたりとかした？」
「そんなんじゃなくて…謝ろうと思って。…昨日はゴメン」

「昨日？」
「――キス…したこと」
「え？キス？」

急に出て来た言葉に頭がついていかない。
ってか記憶にない。
私が謝らなきゃいけないことはあった気がするが謝られるような事をされた記憶はなかった。

「ゴメン。それだけだから。仕事頑張れよ」
「あ、うん、ありがと。そっちこそ頑張れ」

クエスチョンマークが頭に沢山浮かんだまま、電話は切れた。
奈美はしばらく携帯を見つめて考え込んでいた。

（キス――？）

記憶には全く残っていないけど…わざわざしてないことを謝るなんてことはしないだろう。
――と言うことは答えは一つだ。

（…マヂ――？）

一つの答えを導き出して大混乱に陥りそうになった奈美をだが、始業のベルがなると同時に我に返り、受け持ちの仕事をするべくデスクにつくのだった。

第5話　殻

合コンのメンバーと顔を合わすたびに、色々と聞かれ、頭痛が酷くただでさえ機嫌が悪いのに、3時を過ぎる頃には誰も話し掛けられないぐらいに話しかけにくいオーラがただよっていた。
それに負けじと話し掛ける奴もいたわけだが…。
それでもなんとか定時までに仕事を終え、帰ることが出来そうだった。

「…お先に失礼します、お疲れ様です」
「お大事に～」

四方八方からそんな声が聞こえるのは二日酔いだと知れているからだろう。
平日の終わりである金曜日に定時に上がるのは久しぶりだった。
時間が早い為か、いつもほど寒くはなかった。
といっても今年はそこまで寒かったという記憶自体がないのだけど。
暖冬だったために勘違いしてしまった梅が至る所で目につく。
まだ2月も半ばだというのに満開になっている梅の木が家の近くにあった。
蕾の時から花が咲くまでを毎日見ていた。
季節は春に変わろうかとしている。
それを肌で感じていた。
現在だと思っている今は思った時には過去に変わり、また新たな今を迎えている。
あの失恋も…季節と共に忘れられるだろうか。
日常の喧騒が遠くに聞こえる。
幸せだと感じた時期もあったはずなのに…不意に思い出すのは辛い過去だけ。

（いい事より悪い事の方を覚えているなんて猫みたいだな…）
猫は自分の身を守るために、一度恐怖や危険を感じたものには生涯拒絶を続けるという。
そのあとどんなにいい事があったとしても上書きされることはない。
一度の傷が生涯続く…。

（そんな風には……なりたくないなぁ～）

そう思う。
辛いことがあったからといって、いつもそうなるわけではないのだから。
――臆病に――なる。
それはきっと仕方のない事だろう。
誰しもがそうなるのだから。
その期間に差はあれど、殻を破る時期を待っているのだから。
けれどやはり、留まるのではなく、待っているだけなのだ。
また、飛び立つために。
傷ついた羽根を癒して――。
そんな事をつらつら考えている奈美を、朝と同じ着信音が現実に連れ戻す。
途端に街の喧騒が戻ってくる。
主張を続ける携帯を取り出し画面をみると、小さな画面には奏司と表示されていた。

「もしもし？」
「おつかれ～仕事終わった？」
「終わらないと電話出れないよ」
「そりゃそうか（笑）体調平気そうならなんか食いにいかね？」

「……お酒はなしでしょ？」
「まぁさすがに…飲み過ぎてるからなぁ」
「今何処？」
「ん？新宿」
「んじゃ東口で。２０分ぐらいで着くと思うから」
「了解～」

二日酔いのせいで荒立っていた気分が面白いように波を引く。
嬉々として、奈美は電車に乗り込んだ。

第6話　待ち合わせ

電車に乗って15分ほど。
金曜ということもあってかすごい人の数だ。
電車の本数が多いことで有名な山手線が、毎回人で一杯になるのだから。
予想通り東口に着いた時にはため息が出る。
人、ひと、ヒト。
大人数で待ち合わせをしていそうな集団がいたり、恋人でも待っていそうな人がいたり、そんな彼等を集客しようと飛び回るキャッチ。
場所もわからずに探しても探し人が見つかることはまずないだろう。
奈美は携帯を取り出して一番新しい着信履歴を選ぶ。
機械的な呼び出し音が数回聞こえた後、
「奈美？」
と自分を呼ぶ声がする。
目的の人に繋がったらしい事を知り少し安堵する。
あまり電話をかけなれていないのだ。

「東口着いたけど今どこにいる？」
「ん～アルタ前かな」

東口駅前から正面に見える広場を越えて、道路を隔ててアルタ前歩道を見渡す。
歩道には人がこれでもかっていうほど溢れている。

「どのあたり？」
「無料雑誌前
「道路側？アルタ側？」
「道路側」

段々と絞り込まれた情報を頼りに視線を巡らす。
携帯を片手に辺りを見回す人を発見する。

「あ～今日スーツ？」
「そ。まぁ仕事後だし」

多分今自分が見つめている人間で違いないだろう。

「後ろ向いて？道路側」
「こうか？」

見ていた人が声と同時にこちらを向いた事で確信する。
奏司も奈美の事に気付いたらしい。

「そっち行く」

そう一言言い残して携帯を切る。
ヒラリといえばいいのだろうか。
携帯を切ったと思ったら掴んでいたガードレールをなんの予備動作もなく飛び越える。
とても軽々と。
多分見計らっていたのだろう。
信号は赤になっているから車は通らない。
そんな中を奏司は小走りに奈美の所まで行く。
またもやガードレールをヒラリと飛び越え、奏司は奈美の眼前に立つ。

「お待たせ」

そう言った奏司に、あぁカッコイイんだなっと、改めて奈美は思った。

第7話　朝（前書き）

熱出してダウンしてました【<>。】
皆様もお気をつけ下さいｍ（__）ｍ

第7話　朝

朝日が差し込み、部屋がいつもよりも白く感じる。

「ん～」

久しぶりに迎えた気持ち良い朝だ。
最近は寝てる時間ほどにはグッスリ寝てるとは言えなかったから。
大きく伸びをすると身体の隅々まで血液が行き渡るようで心地いい。

「ん？」

ふと見慣れているはずの部屋に違和感を覚える。
青系で纏められた部屋――のはずだったが、今奈美がいる部屋の基調は明らかに緑。
覚えのない家具が至る所においてあった。

「――？」

必死に記憶を辿る。
新宿で待ち合わせ、近くの定食屋に入った。
尽きない話に食べ終わってからもまだ話したくて。
まったりゆっくりしたくて、行きつけのバーに引っ張って行った。

「あ～時間忘れて話し込んで…終電逃したんだっけ」
「だから連れて来たの」

自分ではない誰かが続きを付け足す。
すぐ隣から聞こえたその声にやっと隣に人が寝てたことに気付く。

「奏司？」
「おはよ。合点はいった？」
「あ、うん。また迷惑かけたみたいで…忝ない」
「ぷっ（笑）やっぱ奈美面白いわ。普通忝ないとか使わないぞ」
「そ？」

そういえば時々仲のよい友達にも言われることがあったっけ。
別に意識してというわけでもなく、極自然に出てくるのだ。
思い返してみると一昨年亡くなった祖父からうつったんだろうと思いあたる。
とても古風な話し方をする人だったから。

「変…かな？」
「へ？いや？いいんでない？身近な人の口調がうつっただけだろ？」
なんて事はないという風に受け入れてくれたことがとても嬉しく感じる。

「何？奈美は直したい？」
「ううん。直したくない」
「ならいいじゃん。な？」
「……うん」
「ん？」

優しく頭を撫でる手が霞んで見える事で、初めて自分が泣いていることに気付いた。

「どした？」
「…えへへ…涙…止まらないや」

「泣きたい時は泣いとけよ」

安心感というのだろうか。
溢れてくる涙は止められない。
でも悲しいわけじゃない。
淋しいわけでもない。
ただ溢れる気持ち。
嬉しくて。
とても嬉しくて。
泣いてる姿を人に見せたのは初めてだった。
小さい頃から人前だと泣けない子だったから。

「よしよし」

といいながら、幼子にそうするように自分の頭を撫でる奏司。
それがとても優しくて。
素直に甘えている自分を不思議に思いながら、奈美はただ涙を流し続けた。

第8話　「覚えておいて」（前書き）

毎日…とは行かないまでも。
細々と　書き続けるので、これからもよろしくお願いしますm（
）m

第8話　「覚えておいて」

「奈美年齢聞いて平気？」
「２３。奏司の一つ下」
「年下かぁ」
「嫌？」
「あ～そういう意味じゃねぇよ」
「じゃぁどういう意味？」
「それは…そのうちな」

優しく撫でていたその手で髪をぐちゃぐちゃにする。
髪が長いわけではないし、髪質もストレートなのでとくに乱れる事はないのだが、軽く奏司を睨んでみる。
奏司はというと全く怯む事なく穏やかに笑っている。
そんな奏司につられて奈美も笑う。
もう涙は渇いていた。
お互いなんとなくこの距離が心地よく、動く気にならないのだ。
奈美は気付いていた。
気付くと笑っている自分がいる事に。
臆病になっていたはずなのに、そんな事を忘れてしまっている事に。
――奏司となら。
つい先日初めて会ったというのに、何年も付き合いがあったかのように感じる。
一緒にいてしっくりくる――そんな感じ。

「もちょっと女の自覚持てよ？」
唐突に、奏司が言う。
ちょっと怒っているような…そんな感じに。

「そんな事言われても…こんな性格だしなぁ～」
「奈美は女らしいよ」
「ぇ？」
「奈美は女だよ」

とても真剣な顔。
ドキっとする。
こんな顔をされると。

「少なくとも俺にとってはね」

ニカッと魅力的な笑み。
ついで一瞬のキス。

「覚えといて」

――ボッと。
一瞬で顔が赤くなる。
赤くなる理由が突然のキスの為か、奏司の言葉の為か奈美にはわからない。
ただ、奏司しか写らなくなりつつある自分を漠然と実感するのだった。

第8話　「覚えておいて」（後書き）

感想なんて頂けると泣いて喜びます（ノ∇≦＊）♪

第9話　気持ち

家に着き、軽くシャワーを浴びてジャージに着替える。
昨日泊まりに行った時には化粧を落としていたそうで、特に肌に悪影響は見受けられない。
短い髪にドライヤーで風を送る。
自然に乾く長さではあるのだが、髪が水分を含むと痛みやすくなるので乾かすのは癖になっていた。
亡くなった祖父が孫の髪が綺麗な事をとても自慢にしていたから。
一昨年までは、奈美の髪は長かった。
腰ほどまで伸びていた髪は、祖父の葬式が終わったその日に切りに行った。
美容師の方に5回ほど確認を取られたのはまだ記憶に新しい。
長い髪も好きだったが、長い髪はどうしても祖父を思い出さずにはいられなかったから。
仕事関係の人達は奈美の髪が長かった事はしらない。
もちろんアイツも…知らない。
親友は知っていたが…それを話題に出すことは既になかった。
髪を短くするのと同時に服装をガラリと変えた。
スカートをあまり着なくなり、パンツルックが多くなった。
ある意味祖父が亡くなったことは奈美の転機となっていた。
強くなりたかった。
祖父がいつもそう言っていたように。
強く、ありたいと望んだ。
女らしいと言われた容姿は何処か嫌になった。
弱いと言われている気がして。

『無理してるかな』

そんな風に思ったりもした。
けれど、その逆も思う。
変わってから告白されて、彼氏が出来て、認められた気がした。
結局それはただ幻想を抱かれていただけだったけど。

「女としての自覚……かぁ」

鏡の向こうにいる私を見る。
髪が長かった時を女らしかったと考えるなら、今は少年という感じがする。
利発的な印象そのままに、性別だけ変わった感じ。
女の自覚がない訳じゃなかった。
泊まりに行ったことに一番驚いてるのは私自身なんだから。
女友達のトコならアポなしで泊まりに行ったことも幾度かある。
けれど異性のトコに泊まりに行ったのは初めてだ。
彼氏の家にすら泊まったことはなかったのだから。
不思議に思う自分。
けれど反面納得している自分。
奏司だから。
彼だから泊まりに行ったのだと思える。
そして元をただせば、彼だからあまり終電を気にする事なく、終電を逃したのだと思う。

（私にとって彼は何――？）

自分に問い掛ける。

（――会ったばかりだけど心許せる人……）

私は答える。

その答えに偽りはない。

（好きなの？）

私はまた問いかける。
自分の中の感情に名前を付けたかった。
明確な名前を。
――けれど。

（……わからない）

それが答えだった。
好きだと言うのは簡単な気がした。
けれど、アイツにフラれた私が彼に惹かれるのは当たり前……そんな気がした。
私は――寂しいのだ。
その寂しいという感情を恋と取り間違えているのではないかと、そう思うのだ。
それは相手に失礼だと思った。
そしてその逆に、彼もまた感情を取り間違えているのではないかという危惧があった。
――恐怖――ともいうかもしれない。信じられないのかと聞かれればきっと否と答えるだろう。
けれどやはりまだ臆病になっている自分を自覚していた。
何が怖いのかと聞かれればそれはきっと離別。
そして拒絶されることだろう。
こんな短時間でここまで心を許せてしまう人から拒絶されたら――。
そんな事――考えたくもなかった。
惹かれている自分は否定出来ない。
けれど受け入れてもいけない気がする。

もう一度鏡を見つめると頼りなさげな顔が見える。
何処か決めかねている顔。
目をつぶる。
奈美の瞼の裏に浮かんだものがなんだったのか。
ゆっくりと目を開けた奈美には既に迷いの色はなかった。

第１０話　二人の想い（前書き）

遅くなってしまい申し訳ありませんm（．｜．）m
今回は初めての奏司目線です。

第１０話　二人の想い

――　ｓｉｄｅ　ＳＯＵＺＩ　――

別に行きたくていったわけでもない――どちらかというと無理矢理連れていかれた合コンの場。
何かを望んですらいなかったその場で――彼女に会った。
――『颯　奈美』――
特に意識したわけでもなく、とてもすんなりと自分の中に入って来た。
もとからそこにいたのかのように…。

合コンでの印象は気配りの出来る人。
他の女と違って合コンにノリ気な感じはしないのだが、細かい事に気を配っていた。
盃があけばさりげなく注文を聞き、定員を呼ぶ。
皿があけば定員が気付きやすい所に重ねて置く。
当たり前の事かもしれないが、生憎と自分の周りにはそういう子がいなかったので、それとなしに見ていた。
ボーイッシュな見た目と相反していて余計に目についたのかも知れない。
彼女の方から話かけられ、いらつきしか感じなかった合コンを抜け出し、あまり酒を飲んでなかった彼女を飲みに誘った。
話をしてみると今まで俺が付き合って来たタイプとは正反対だろう事はすぐに気付いた。
サバサバしていて、考え方も男よりな所があり、しっかりと一本線が通っているようで話しやすい。

凛とした強さ――というのだろうか。
守らなきゃいけないと思うタイプじゃなかった。
どちらかというならば支えてあげたいと思えるタイプ。
疲れた時には休ませて、立ち止まりそうならそっと背中を押したくなる――そんな感じ。
確かにしっかりとしてる。
多分彼女の年代以上にしっかりと先を見据えている。
けれど…女だ。
目の前で俺の顔を見上げる彼女を可愛いと思った。
男に媚びを売らないその性格が凛々しいと思った。
無防備過ぎるかもしれないが、彼女の純粋さを表すようで好ましかった。
気付いたら、彼女に男として見てほしいと思うようになっていた。

第１０話　二人の想い（続）

――　Ｓｉｄｅ　ＮＡＭＩ　――

友達以上恋人未満。
評するならばそんな言葉が当て嵌まるだろう。
お互いに時間があれば出掛けていた。
映画だったり、公園だったり、買い物だったりといく場所は様々。
けれど会話が尽きる事はなかった。
そして一緒に何処かに出掛けるたびに、趣味や興味が似ていることに気付く。
例えば。
気が付くと同じものを見ていたり。
気が付くと思っていることを相手が口にしていたり。
その度にざわめく心を押さえ込む。
不安は消えず、どちらかというと日増しに大きくなっていく。
けれど奈美はその事を考えないようにしていた。
奏司の方もあのあと、そういう話には一言も触れなかった。
お互いに今の関係でいいと思っているのかもしれなかった。
その気持ちが無理をしているものであっても…。
距離を置くべきなのは理解していた。
けれど同時に離れられないとも思う。
楽しかったから。
それがどんな所であっても。
奏司とならば楽しかったから。
今はまだ先には進めない。
けれど後退する必要性もないと思う。
ジックリと自分の気持ちを見定めていきたかったし、その時間はあ

るものだと思っていた。
あの時までは…。

いつもと何の変わりもない晴れた日だった。
普段と違う所があるとしたら移動に公共機関を使ってない所だろうか。
午前中から合流し奏司の車で海に向かっていた。
発端は海に行きたいと言った私の言葉だった。
奏司は車に乗りたかったらしく、二人の意見を総合してドライブがてら海に行くことにしたのだ。
朝８時に私の最寄り駅に待ち合わせた。
紺色の車体がまだ人も疎らな週末の朝、ロータリーに入ってくる。
朝日に照らされキラリと光る車体がなんだか眩しい。
今まで付き合って来た中で車を持ってる奴がいなかったからこそ余計にそう思うのかも知れない。
車体はロータリーをゆっくりと回り、奈美の目前で停止する。
内側から開けられた助手席の向こうに見知った顔がある。

「おはよ、待たせた？」
「おはよ～、さっき来たトコ。時間ピッタリだよ」

そういいながら開けられたドアから助手席へと腰を下ろす。
ドアを閉めると奏司が少し驚いたような顔をしている。

「ん？」
「奈美免許持ってる？」
「言ってなかったっけ？」
「運転するんだ？」
「実家ではよくしてたよ。今は…足がないからなぁ」

交通の便がいいことと、もう一つは維持費が高いという理由から車を買ってはないのだ。
車に乗るのがなんだか懐かしい。
それもＭＴ車なら尚更だ。

「後で運転する？」
「え？いいの？」
「ＭＴの免許持ってるんだろ？？」
「そ♪やったね♪」

話始めてすぐに緩やかに動き始めた車は留まる事なくスムーズに動いていく。
奏司の運転には全く危なげな所がないからついウトウトしてしまう。

「いいよ寝てて？着いたら起こすからさ」
「ん～でも…」

運転してもらってるのに隣で寝ちゃうのも…。

「帰りは俺が寝かせてもらうからさ」

些細な抵抗を試みたけれど、いつの間にか奈美は寝てしまっていた。
隣で奏司が愛しそうに奈美を見つめている事に気付きもせずに…。

第１０話　二人の想い（続）（後書き）

小話書いてたら…消えちゃった（ノ―・、）

第１１話　広大なもの

「奈美、着いたぞ」

声と同時に身体を揺さぶられて重い瞼を持ち上げる。
初めに目に飛び込んで来たのは真っ青な海だった。
続いて自分を見上げる奏司の顔。
奈美が下向きに寝ていたので下から覗き込んでいたらしい。

「……何してんだ？」
「ん…なんとなく」

怪訝な顔をしながらも大人しく撫でられているのは嫌ではないという事だろうか。
気付いたら奏司の頭を年下にそうするように撫でていた。
見上げてくる奏司が可愛かったから…っぃ…。
考えてみると年上の男性に何をしてるんだとも思うけど…。

「奈美さ…」
「…ん？」
「海来たかったんだろ？」
「ん」
「――寝ぼけてんな？」
「…ん」

ポカポカと温かい陽気がなんとも心地いい。
今寝たらとてもいい夢が見れる気がする――とまたウトウトしかけた時、頬をおもいっきり引っ張られて目が覚める。
先程まで抵抗もせずに大人しくしていた奏司の顔が、意地悪気味に

微笑んでいる。
その伸ばされた手は真っ直ぐに奈美の両頬を掴んでいた。

「――…いひゃい（痛い）」
「起きたか？」
「ごめぇひわくをおかけひまひた（ご迷惑をお掛けしました）」
「ならよし」

言葉と同時にぱっと手を離した奏司に変わって、奈美の手がジンジンと痛む頬を摩る。

「ぷっ、何笑ってんだよ」

頬が緩んでいることには気付いていた。
頬を抓られたあとなのに笑ってるっていうのがなんだか可笑しいが。

「なんかね、こんな風にからかわれたの初めてだから。なんか嬉しくて」
「からかわれたいの？」
「ん～、わかんない」

自分でもおかしな反応だとは思うけど、実際そうなのだからしょうがない。

車から出ると一面に広がる青い海。
示し合わせたかのような青い空。
そして白い砂浜。
まるで海外にでも来たかのような光景に唖然とする。

「綺麗だろ？」

「……ここ何処？」
「秘密の場所。気に入った？」
「超気に入ったっ！」

文字通り目を輝かせながら奏司の腕を引っ張って海へと向かう。

「ぷっ、急がなくても逃げないって（笑）」

そんな奏司の言葉を耳にしながらも、奈美の足は留まらなかった。
海が好きだった。
毎日のように眺めていたいとすら思う。
その広大さに見せられて、その吸い込まれるような青に惹かれて。
波打ち際まで一気に駆けていく。
澄んだ水がとても綺麗――。
――とか奈美が感慨に浸っていた時だった。

「あはははは…っく、やべツボ…あはははは…」

片手を腹に当てながら奏司大爆笑。
どうやらツボに入ったらしい。
それとなく自分の事だろうと察した奈美は静かにサンダルを脱いで海の中へ。
ひんやりとした水温が興奮でほてった肌には気持ちいい。
奈美のそんな行動には全く気付かず笑い続ける奏司の顔にバシャっという音を立てて水が弾ける。
途端笑い止んだかと思うと海水を飲んでしまったらしく激しく咳込んでいる。
それを見て次は奈美がお腹を抱えて笑い出していた。

「……ぷっ…」

こちらは声にすらならないらしくその顔は苦しそうだ。
途端。
――バシャ
と水をかけられるのは当たり前といえば当たり前で。
そのあと水の掛け合いを行って二人ともビショビショになったのは
言うまでもない。

第１１話　広大なもの（後書き）

最近更新が遅くなってしまい申し訳ありませんm（．＿．）m
細々と完結までは進めていくつもりです。
これからも見捨てずに付き合ってやって下さいゞ（ＴＡＴ；））））
．．．
では。
また後日m（＿＿）m

第１２話　別荘？（前書き）

ずっと更新をサボっていました筆不精な作者をお許し下さい（；′Д；）ノ

…書くのではなくずっと人様のものを読んでいましたっ！

私も頑張らなければっｏ（＊≧Д≦）ｏ”））

では本編をどうぞｍ（＿＿）ｍ

第12話　別荘？

「あ～文字通りビショビショだね…どうしよっか」
「ん～この辺りに知り合いいるから行くか？」
「近いの？」
「あぁ、すぐそこ」
「ん～迷惑にはならないかな？」
「あ～それは平気。逆にもっと顔出せって怒られると思うぜ」

先導する奏司の顔が悪戯っ子のように微笑む。
手を引かれながら歩く砂の上は波の音以外には砂を踏み締める二人の足音しかなくて。
握りあった手がとても熱いのはきっと勘違いじゃない。
もう子供と言える年でもないのに、手を繋ぐというこんな些細な事でも心臓が張り裂けんばかりに律動を繰り返している。
そんなこちらの心境がバレはしないかと冷や冷やしながら砂の上を歩いていく。
見えて来たのは別荘という感じの南国風の建物。

「あそこ？」
「そ。あ、ちょっと待ってて」

そういうと握っていた手を離して一人で先に行ってしまう。

（もうちょっと…手繋いでたかったなぁ～――なんてキャラじゃないよね…）

さっきまで彼の体温で包まれていたその手をギュッと握りしめる。

そんな風に移った体温が逃げていかないようにしている自分を面白く思いながら、彼の一挙一動によって揺れ動く自分が嫌いではなかった。
ゆっくり考えればいいかと思いながらすでに動かされている自分。
寂しさの為かもしれない。
でも、そこから始まっていたとしても、思う気持ちは本物なんだから…それでいいかなと思う。
留める必要はないのかな――と。
こんなに早く傾くとは思っていなかったけど。

「奈美～」

茫然としていた私を、奏司の声が現実に連れ戻す。
見ると奏司が門の前で手招きしている。
隣にはとても優しい顔の女の方。
歳は３０後半から４０ぐらいだろうか。
清楚な衣服にエプロンをしているからかとても柔和な雰囲気を醸し出している。

「奈美、こちら沢田千歳（サワダ チトセ）さん。千歳さん、こっちは俺の友人で颯奈（ハヤテ）美（ナミ）」
「初めまして。休日に突然押しかけてしまいご迷惑おかけしてしまいまして…」
「あら？いいのよ～逆に感謝してるぐらい。こういう事でもない限り奏司さんったら来ないんだもの」
「だからそんな事ないですって」

どうやら奈美がいないうちにあらかたからかわれたらしい。奈美と目が合うと、やっぱり言われたと言うことなのか肩を竦める。
「まぁまぁ外で立ち話もなんなので中へどうぞ。まずは二人ともお

風呂に入って来て下さいね」
「俺手前入るから千歳さんこいつを奥まで案内してもらっていい？」
「わかりました。なら奏司さんには後で着替えをお持ちしますね」
奈美にはわからない話を進め、最後まで聞いてやっとお風呂の事だと思い付く。

「奈美さん……でよろしいかしら？」
「え？あ、はい」
「こちらです。奥のお風呂はとても眺めがいいんですよ？」
「そうなんですか？」
「それはもう。お風呂好きな奥様が嗜好を凝らしてますから」
「そうなんですか…、私もお風呂好きなんで楽しみです♪あ、そういえばこちらは何処の地域になるんですか？奏司さんからは教えて貰えなくて…」
「言って差し上げたいですが奏司さんが黙っていることを私から言うことはできないの、ごめんなさい」
「あ、あまり気にしないで下さい。またしつこく聞いてみますよ」

歩きながら進んでいて、奈美の目に映ったのは立派な渡り廊下。
まるで豪華な庭に架けられた橋のようなそれは、けれどなんの違和感もなくそこに佇んでいた。
曝されていそうなそんな場所で、けれどまるで鏡面のように磨かれたその木目は今まで歩いていた廊下と何ら変わりない。
その奥にまるで小さな家の様に佇むその小屋は、年月のみが醸し出すことの出来る雰囲気が漂っていた。
どこか郷愁を思い起こさせるそんな雰囲気を――。

「服は洗ってしまいますので、中に置いてあります服をお召しになって下さいね」

「え、ぁ、はぃ。本当にご迷惑…」
「待ったっ！謝罪なんて聞きたくないわ」
「千歳さん？」

言いかけた言葉を遮り千歳はむくれたような顔をする。
それを見て、ここに来てから奈美は謝罪しか口にしていない事に気付く。
これほど良くして貰ってるのに謝罪しか…。

「千歳さん」
「ん？」
「ありがとうございます」
「ふふ、やっと笑ったわ♪」
「ぇ？」
「自覚はないんだろうけど来てからずっと張り詰めたみたいな感じだったから。もっと肩の力抜いてね。自分の家だと思って貰ったっていいぐらいなんだから」
「…はい。ありがとうございます」
「んじゃ入っちゃいなさい」

そういって千歳は奈美をその小屋の中へと押し込める。
パタンと背後で扉が閉まる音がした。

第１２話　別荘？（後書き）

やばぃ。
話の流れがどの方向に流れるのか不明です（ノ―・、）
……行き当たりばったりでお送りします（・・；）
……悪しからず（＊｀∇｀＊）

第13話　ワンピース（前書き）

遅くなってしまい申し訳ありませんm（__）m

第13話　ワンピース

「これ……着るの？？？」

お風呂から出て着替えを手にした奈美は固まるしかなかった。
目の前に並んでいるのは女の子女の子したフリフリのワンピース達…。
そしてそれに輪をかけるように置いてある女らしい小物達。
タンクトップにジーンズという恰好がほとんどである奈美にとって、これらの服を着ることにかなり躊躇いがある。
しかし着て来た服は千歳さんが洗濯するといって持って行ってしまったので、実質これしか着れるものはないのだが…それにしたって抵抗感は消えない。
しばらくタオル一枚という形で服の前を行ったりきたりを繰り返していたが、覚悟を決めて服を選び始める。
奈美が手にしたのはクローゼットいっぱいにある服の中で一番シンプルな服。
水色で割りと細身なノースリーブのワンピース。
背中にあるファスナーを上げて鏡を見ると自分ではないような違和感を受ける。
短い髪が服に合わなかったが、ピンなどを使って簡単にアレンジするとその違和感も消える。
鏡に映るのは自分なのに、見慣れない恰好をしているのでなんだか自分ではないようで。

「変……じゃないよね？」

鏡に映る自分をもう一度見返し、おかしなところがないことを確認すると出口へ向かう。

何処に行けばいいのかはわからないので、まず玄関まで行ってみようと思い扉を開けるとすぐそこに見知った顔があった。

「奏司？待ってたの？」
「え？あ…あぁ」

奏司は奈美を見ているのにどこか上の空で、呆然と奈美の頭から足元までを何度も視線が往復する。

「何？やっぱり変？」
「あっいや、そういう意味じゃなくて…似合うなぁ…って」
「そ？こういう服久々に着たから自分でも違和感あって」

スカートの裾を軽く摘み上げて首を傾げる姿は小さい頃によくやっていた事。
奏司の方が身長が高いのでうわめづかいになってることに奈美は気付いていない。
奏司は奏司で今まで見ることのなかった奈美のそんな姿に釘付けで、心なしか顔が赤くなっている。

「……煽るなよ……」
「え？なんか言った？？」

ボソリと呟いた囁きは奈美の耳には届かない。
奏司は聞き返した奈美の問いには答えず、続いて見上げてくる奈美のおでこを指で弾くと、さっさと歩き出してしまった。
奈美はその姿をキョトンとして見送りそうになり、慌てて追い掛けるのだった。

第13話　ワンピース（後書き）

奏司煽ってしまいました（ノ∇≦＊）♪
奈美は素でやってるので質が悪い??（笑）

第１４話　膿（前書き）

多少暗い表現が含まれています。
御見知りおき下さいｍ（＿＿）ｍ

第１４話　膿

「似合ってますよ。ねぇ奏司さん」
「ん、まぁ…」

リビング（だと思う）に着いた後、千歳さんが持ってきてくれたアールグレイを飲みながら手作りのお菓子を摘む。
話題は専ら私の今の服装についてだった。
普段の格好が格好であるだけに、今のような格好は結構面食らうらしい。
会話の最中ずっと奏司は積極的に話す事をしなかった。
代わりに痛いぐらいの視線をずっと感じていたのだが、何か言ってくる気配はないので気にはしつつもきっかけを掴めない。

「ずっと屋内に引き留めるのもあれだし、雑木林でも歩いて来たら？この時期凄く居心地がいいのよ」
「そうなんですか？それじゃ行ってみたいな」
「奏司さんお願いね」
「はいはい、奈美行くぞ～」
「あ、ぅん。千歳さんご馳走様です」
「いってらっしゃい」

二人を見送る千歳さんの声を聞きながら、スタスタと歩いていく奏司を追いかける。
いつもより少し早い速度で歩く奏司は奈美の方を振り返りもしない。
玄関から外に出、そのまま雑木林の中に入っていく。
夏場の馬鹿みたいな陽射しを和らげているから空気がヒヤリとして心地よい。
木々の間を縫うように抜けてくる木漏れ日がキラキラと降り注ぐ。

息を大きく吸い込むと澄んだ空気が肺を満たす。

「ん～気持ちいい～」

身体の疲れを癒しながらそんな光景を眺めつつ、澄んだ空気を吸う。
気付くと奏司の姿はそこにはなく、どうやら置いていかれたらしいのだが、そんなことは些細な事のように思えた。
お互い大人と言われる年齢だし。
何より奏司が少し怒って見える原因は自分であると思えるから、少しそっとしておく方がいいのかもしれない。
キラキラと輝く木漏れ日を見ながら些細な事がありありと蘇る。
女らしい今の恰好を見た時の奏司の顔――。
とても驚いた顔をしていた。
あの顔は何を示すんだろう？
似合わなかっただろうか？
それとも…――。
記憶が蘇る。
まだ古いとは言えない新しく鮮明な記憶。
自分の中にたゆたうドロドロとした暗い感情に飲み込まれるような感覚。
一挙一動すら鮮明に蘇る自分の記憶を疎ましく思う。
それは作られていた映画を何度も目の前で上映しているかのようだ。
目を反らしてしまいたくて、けれど顔を背ける事が出来なくて、目をつぶると瞼の裏での上映が始まる。
音はない。
けれど私はその映画の一字一句を覚えていて、意識しなくてもまるで初めから音があったかのように流れている。
――痛い……。
そして…息苦しい。
精神が五感を刺激していく。

いつの間にか苦しさから胸を抑えるような格好になるが、当人である奈美は気付かない。
否、気付く余裕などそこにはなかった。
その映像は奈美を縛り付けてもなお続いていく。
夢であれば悪夢であっただろう。
けれどそれは紛れも無い現実で、起こったことは消す事も修正する事も出来ない。
気付かない振りが出来るほど奈美は強くはなかった。
気付かないでいられるほど、無邪気でもなかった。
その両方が揃っているからこそ負った傷。
傷口は塞がったかのように見えるのに、皮膚下ではドロドロとした膿が渦巻いている。
膿を伴ったままでは治らないのだと分かってはいたが、それでも表面上だけでも繕ってしまう。
それが余計に傷の治りを遅くしている事など気付かぬまま…。

ドクン。

心臓の高鳴りがとても大きく聞こえる。
その映像から逃げるように奈美は走り出した。
声も絵も何処までもついてくる。
逃げることなど出来ないだろう…と頭ではわかっている。
これは自分が体験した過去の記憶が蘇っただけだから。
フラッシュバックと言われる現象。
『あの時と同じだ』と記憶が重なる。
確かあの時もがむしゃらに走ったんだ。
その場から少しでも遠くに離れる為に。
自分を呼び止める声も聞こえる。
どれぐらい走っただろう。
急にグイッと進行方向とは逆に引っ張られる。

態勢を崩したまま地面に叩きつけられる事を覚悟してギュッとその瞳を固く閉じる。
けれど固い地面に叩き付けられる事を覚悟した奈美だったが、次に感じたのはフワリとした温かな体温だった。

第１４話　膿（後書き）

わぁ～いゞ（@^▽^@）ノ
１４話まで完了しましたぁ～ゞ（@^▽^@）ノ
これも皆様のおかげです♪d（*｀o｀）
こんな奴ですが完結まで付き合って下さると嬉しいですm（｀｜．）m
ではまた♪

第１５話　響（キョウ）（前書き）

遅くなってしまいましたΣ（＜Д＞；）週に一度ぐらい更新できるように頑張ろうと思いますので…責っ付いて下さいネｏ（＊＾▽＾＊）ｏ～♪

第15話　響（キョウ）

「足はえ～…」

乱れた息そのままに、自分を抱き留めている人物を見上げる。
奏司とは違う茶色い髪。
茶色い瞳。
身長は奏司と同じぐらいだろうか？
息遣いの荒さから触れている胸板が激しく上下し、額にはうっすらと汗が滲んでいる。

「よくそんなんであれだけ走れるな？まともに走ったら俺負けるんじゃね？」

指差す先を見ると自分が今掃いている靴をさしていた。
5センチほどのピンヒール。

「いくら呼び止めても聞かないんだもんな。危ないぜ？この先崖だから」
「崖？」
「そ。海に真っ逆さま。下は切り立った岩石多数。そっから見る景色はめちゃめちゃいいんだけどな」

歳は同じぐらいだと思うのだが、笑うと何処か幼く見える。
そんな人懐っこい笑み。
奈美があたりを見回すと随分と走って来たらしく、少し先では雑木林が開け、海が見える。
その景色にも惹かれる。

「ありがとう、私は奈美。あなたは？」
「ナミ？俺は響（キョウ）」
「キョウ？」
「そ、響くって書くんだ。兄貴は奏でるって入るんだぜ？」
「奏でる？」

同じく音の関わる名前だからだろうか。
奏司の名前が浮かぶのは。

「奏司っていうんだ」
「奏司の……弟？」
「あれ？兄貴の知り合い？」
「そうみたい（笑）」
「あ～考えてみりゃ当たり前か、ここ私有地だしなぁ」

私有地という言葉に呆然とする。
先程の建物やその調度品を見ながら豪華だなぁ～とは思っていたが…。
あとで奏司に聞いてみよ。

「え～とナミは兄貴の彼女？」
「ううん、ただの友達だよ」
「そっか、よかったぁ。兄貴とタメ？」
「一個下」
「んじゃ俺とタメじゃん」

とても嬉しそうに笑うから、先程感じた違和感をすぐに忘れてしまう。
大切な違和感であったのに。

「奈美？」
「ぁ、奏兄、おひさー」
「響？」
「奏司」

雑木林の間から顔を覗かせたのは先程まで機嫌が悪そうにしていた張本人であり、今噂していた奏司だった。
奏司は私達二人を交互に見比べ、その眉間に皺を寄せて響を睨む。

「何した？」
「へ？」
「奈美に何したんだっ！」

今にも掴みかからんばかりの奏司に二人とも皆目見当がつかない。
そんな響の様子に更に腹をたてたらしい奏司は響の襟首を掴み上げる。
「ちょっ…、奏司待っ…」
「なんで奈美が泣いてるんだ！」
「泣いて…？」

多分今まで気付かなかったであろう響は改めて奈美を見つめ、その目が若干赤い事に気付く。

「え、あ…もしかして倒した時！？どっかぶつけた！？」

と傍目にみてもわかるほど激しく動揺する。
そんな響を今だ離す事なく襟元を掴み上げる奏司。
泣いた気はしなかったがどうやら目が赤いのは間違いないらしい。

「待って二人とも。別に響のせいで泣いた訳じゃないよ」
「え？」
「へ？」
「ほら～奏司その手離して」
「――響。わりぃ…つぃ」
「別にいいよ、奏兄。あの状況ならそう思われてもしょうがないし」

すぐにお互いに言葉が出るところをみると二人とも大人だなぁと思う。
もともといい関係を築いているんだろう。
お互いの気が済んだのであろう二人はそのまま奈美に向き直る。
言葉を投げ掛けて来たのは奏司。

「んでもならなんで泣いてたんだ？」
「ん～言わなきゃダメ？」

首を傾げるようにして奏司を見上げると一瞬だけ奏司は眉間を厳しくした。
けれど私が言いたくないと言った事でだいたいなんの話しだか見当はついたのだろう。
それ以上何かを聞く気はないらしく、しょうがないなとでも言いたそうな顔を刹那の間だけ奈美に向けると、それを隠して響の頭にポンっと手を置く。

「聞きたいけど言いたくないならいいよ、なぁ響」
「あぁ、なんかあったら言ってくれよな」
「なんで奈美がお前にいうんだよ？」
「俺のがタメだしいいやすそうじゃん？」
「バカいうな」
「ぷっ。二人に言うよ♪」

「え～！奈美～俺だけじゃないのかよ～」

非難の視線を奈美に送る響だが、笑うだけで交わされてしまう。奈美と奏司の間で幾度かアイコンタクトが行われていたが、響は気付かない。

「ほら、帰るぞ」

「こらっ兄貴襟持つなって！！」襟首を奏司に引きずられるようにして歩く響はなかなかぶざまで、ついつい奈美は笑ってしまう。木々の間から覗く空は、赤とオレンジ、紫と青の見事なグラデーションを奏でていた。

第15話　響（キョウ）（後書き）

出る予定のなかった響君が何処からか出演してきました。
……いつの間にっ！！
あんまり全体構成を考えながら書いてないので、矛盾点がいっぱいあるかもしれません。
そんな時はこっそり教えて下さいね♪
では、感想・応援、メッセージなど、高価な糧になります。

第１６話　一瞬の楽しみ（前書き）

段々と暑くなってきました。皆様夏風邪にお気をつけ下さい。私も気をつけます。

第１６話　一瞬の楽しみ

「なんでお前が乗ってるんだ？響」
「帰るトコ一緒なんだからいいだろ～」
「よくない」
「奏兄のケチ」
「あぁなんと言われてもかまわねぇよ」
「二人とも…子供みたい」

身近で繰り広げられる低レベルな言い合いに、運転手を勤めている奈美は苦笑を浮かべる。
もちろん二人の低レベルな言い争いの原因が自分自身であることなど奈美の考えの範疇ではない。
あの後、３人仲良く別荘に戻り、奈美は既に乾いていた着慣れた服に着替えた。
着替えてすぐ響が勿体ないと主張したがそれもしょうがない事だろう。
主張こそしなかったものの奏司もそう思ったのだから。
勿論奈美の普段の恰好も似合うと思っていたが…それは男のサガだろうか。
女らしい奈美を見ていたいと思う――見るのは自分だけ。
自分の前でだけというのが一際嬉しいものなのだ。
その後３人で仲良く帰ることになる。
約束していた通りに奈美が帰りの運転をすることになり、助手席の権利は奏司に。
当然ながら響は後部座席となる。
奏司も響もお互いが恋敵である自覚はある。
奈美の方は二人のやり取りに笑ってばかりだ。

奈美は響の気持ちには気付かない。
奈美自身が奏司に対する想いを嫌と言う程自覚しているから。
恋は盲目とはよく言ったものだ。
始終そんな調子で奈美の最寄り駅へと到着する。
響は勿論駅名を覚え、響に牽制している奏司を後に、奈美は手を振ると家までの帰路を辿る。
間に考えるのはあの二人の家の事。
別荘に帰る途中に聞いた二人のお家柄。
誰でも名前を知っているであろう大手企業。
奏司は言わずと知れた御曹司ということになる。
よくよく聞くとあの合コンメンバーの全員がそういったお家柄であったらしい。
異様に乗り気だった友達全員の魂胆が見えるようである。
まぁもしもそうじゃなくても張り切っただろうけど。

「あ。そういえば。私合コン抜けてるし話し聞いてないから知らないんだけどなんか知ってる？」
「よくは聞いてねぇけどケンがよく遊びに行ってるって話しだなぁ」
「へぇ～誰だろ？」
「知らない」
「そっかぁ。今度聞いてみようかな」
「気になる？」
「ん？うちらからかわれた時にでも槍玉にあげようかと思って♪」

ピシッと空気が一瞬にして冷たさを帯びる。
奈美はその一瞬を十分楽しむ。

「信じないでよぉ～冗談だよ冗談」
「……奈美ならやりそ」

っとボソッと呟いた響の発言はその場で当然の如くなかったものとされた。
そんな雑木林での話しを思い出すだけで自然と奈美の頬が緩む。
帰りがけにそのまま奏司へとお礼のメールを打つと次の日の仕事を思い眠りについた。
想像以上に疲れていたらしく、奈美がベッドに入ってすぐ規則的な寝息が聞こえ始めた。

第１６話　一瞬の楽しみ（後書き）

最近ブログを離れて書きかけな十数作の小説を書いています。締切に出せる小説家の方々をとても尊敬する今日この頃。
メッセージ、感想など栄養になりますｍ（．＿．）ｍ

第１７話　奏司の想い（前書き）

今回は早い更新になりました～（゜∇^d）！！
これも応援して下さる皆さんのお陰ですｍ（＿）ｍ
これからもどうか宜しくお願いします。

第17話　奏司の想い

奈美が降りた車の中ではたいした会話は成されていなかった。
響は助手席で窓の外ばかりみていたし、奏司は運転をしていたから。
街のネオンは些か早過ぎるぐらいに流れていく。

「奏兄〜」
「ぁ？」

響は流れていくネオンの輝きから目を反らす事なく唐突に兄の名を呼ぶ。
兄弟だからか奏司の方も前方から目を反らす事なく反応を返す。
響はそんな兄が映る窓をちらりと垣間見る。

「奈美に告ったん？」

その質問に奏司の方はちらりと隣に座る響に探るような視線を送るが、いかんせん窓に近すぎるため頭が邪魔して表情は伺えない。

「…それらしい事を言ったことはある。困ってたからそれ以降追求はしてねぇけど」

短い付き合いではあるが考え過ぎなケがある彼女の事だから、何か思い悩むことがあったのだろう。
今まで付き合った事がないわけでもないだろうに、些細な事ですぐに真っ赤になる彼女。
なぜか赤くなった時の彼女は同時に鳩が豆鉄砲でも喰らったような、想像すらしていなかったというような顔を浮かべている。
今までそういう事をされたことがないのだと思うと何処か元カレと

かに勝ったような気がして嬉しくなる。
この年でなんて小さいのだろうと思わないことはないが……恋故だと気にすることはやめた。
彼女を想う気持ちに偽りはないから。

「へぇ～じゃぁ俺にもチャンス有なわけだ」
「無理だと思うけどな」

こう見えて独占欲が強い奏司は奈美の事を誰に渡す気もなかった。
勿論逃がす気も――ない。

「マヂなんだ？」
「あぁ」
「――紗耶香（サヤカ）の時よりも…？」
「――…あぁ」

響の問いに対して答えるのに、奏司は若干の間を要した。
その理由を知っているであろう響はそれ以上踏みいる事なくそこで会話は終わった。

『紗耶香』が奏司にとってどんな存在であるのか奈美は知らない。
逆に奏司が紗耶香にとってどんな存在であるかも奈美は知らない。
『紗耶香』という存在が二人にどういった影響を及ぼすかも二人は知らない。
その事で後で一悶着あるのだが…それはまた別のお話。

第17話　奏司の想い（後書き）

なんだか気付くと登場人物が増えまくってますよねぇ・・・（＝＝）
伏線をいっぱい引くのはいいけど…覚えてられるのかしら??
細かい構成も決めてないまま書き始めたからチグハグがいっぱぃ…
…（・・；）
実はこの小説自分のＨＰでも載せ始めました♪
リンク貼るのではなく背景欲しくてページから作成☆
話にあった背景写真を撮りに行くのが実は1番楽しいかもしれません（笑）
元１２作書き途中で１番更新してるのは「言の葉」気付くと作数が増えるのですが他の更新が滞る作者です（。д。；）
まずは一旦閉めてから他の更新に進もうかと悩み中。
…っとなんだか適当に書きましたがこの辺で。
こんなトコまで読んで下さったあなたに感謝です（＊′ω、＊）ｗ
では、メッセージ・感想・激励栄養になります。

第１８話　奈美の家柄（前書き）

段々作者が暴走しています。どうか温かな気持ちで見ていてやって下さいｍ（．｜．）ｍ

第18話　奈美の家柄

「え？響？」
「早く乗って？」
「え？あ、うん」

急かされた事もあり、奈美は目の前に停車した車に乗る。
運転席には響。
助手席には奈美。
何故こんな状況になっているのかを整理してみよう。
今日は金曜日。
いつも通りに仕事の山を残業2時間で片付け帰路に着こうと会社を出た所だ。
一台の車が真横を並列して走っているかと思っていたら、窓から顔を覗かせたのは何故ここにいるかもわからない奏司の弟の響。
何故彼がここにいるのかわからないまま急かされて彼の車に乗っている。
車は爽快な速度で何処かへ向かっているようだ。
やたら楽しそうな響と、ボケーとした奈美を乗せて。

「――…何処行くの？」
「内緒」
「なんで会社知ってたの？」
「企業秘密♪」

そんな一方的な問答を幾度か繰り返したが、奈美は幾度目かの質問で響に答える気がないことを悟ると問答を諦める。

「他には？」

「はぁ～答える気なんてない癖に～」
「あはは、バレてた（笑）」
悪気なんてないかのように響は爽やかに笑う。
それでも憎めないのだから得な人柄だと思えるのだろう。
奏司といい響といい兄弟揃って奈美に警戒を抱かせない。
それでいいかはまた別の話だが。

「奈美さぁ、いつもスーツパンツルックなの？」
「ん？そうだけど」
「スカートの方は着ないんだ？」
「そだね、持ってないから」
「へぇ…って持ってねぇの！？」
「うん」
「なんで？似合うだろうに」
「気分かなぁ～」
「勿体ないって。あ、今から服でも買いに行く？」
「その前にドコ行こうとしてるのさ」
「ん？兄貴のトコ」
「奏司の？」

先程までいくら問いかけても決して答えなかった響だが、次は自棄にあっさりと肯定する。
その理由を考えながらも奏司の所という一言に不安が和らぐ。

「話変わるけど奈美って実は御令嬢だろ？」
「……調べたの？」

和らいだ途端に不躾にも取れる質問に奈美は今までにないぐらい警戒を強める。

そんな奈美に響は落ち着けよ的な視線を投げた。
「ちょぃっとね。奈美に会ったときにどっかで会ったことがあるような気がして気になったんだよ」
響の脳裏に桃色のドレスを着た髪の長い女の子が浮かぶ。
幼くて詳しくは覚えてないけど何かのパーティーだろう。
背筋のピンと伸びたお爺さんの横に立つ愛らしい女の子。
親父に連れられて挨拶に行った記憶があった。
「奈美が颯会長の孫だったとはねぇ～」
「奏司も…知ってるの？」
好奇の視線に曝されたあの時の記憶が背筋を冷やす。
「いや、知らないんじゃね？あの時は確か兄貴パーティー出てなかったし」
「……」
「気にすんなよ。俺も兄貴も御令嬢に惹かれたわけじゃねぇから」
目に映るきらびやかさとは別に、人の裏にある醜さを幾度も見ることになったのが幼少期だった。
大好きな祖父に人の見方を教わりながら、同時に人がとても怖くなった。
人の余りの醜悪さに心を閉じた奈美を祖父は責めなかった。
逆に優しい子だと褒めてすらくれた。
祖父の意思で私はその後あのきらびやかな世界には踏み入っていない。
長女であり一人娘である私はいつか必ずまたあの世界に戻らなければならないことも覚悟している。

その為に仕事の傍ら経営学から始まり、語学、法学などありとあらゆるものを吸収し勉強している。
その為今の会社に入ることは全く苦ではなかったほどに…。
翻訳から何から殆どの業務がこちらに回ってくる事が些か厄介ではあるけれど。
「俺も奏司も家柄に惚れた訳じゃない。奈美自身を欲しいと思ったんだから」

響の顔を見、奏司の顔を思い浮かべると、先程まで浮かんでいた不快感が綺麗に払拭される。

「ん、わかってる」
「よし、ちょうど着いたし。降りて」

外を見るとあれだけ爽快に走っていた車が綺麗に駐車されている。

「何処？」
「ま、いいからいいから」
「ちょっ！ちょっと」

尻込みする奈美を無視して響は厳かな建物の扉を潜る。

「いらっしゃぃませ」
「あぁ、祥子さん呼んでくれる？」
「はいただ今」

奈美は響のどうみても初めてとは思えないその対応に眉根を寄せる。

「あら？響さんが三芳（ミヨシ）さん以外とご来店下さるなんて初めてですね」

奥からパリッとしたスーツを着こなした女性――多分彼女が祥子さんなのだろう――が歩み寄ってくる。

「連絡はしただろう？」

「ふふ、そうでしたね。ではこちらが？」

「あぁ」

「私この店のオーナーを勤めさせて頂いております折野祥子（オリノショウコ）です。以後い見知り置きを」

妖艶と言えそうな艶めいた笑みが大人の色香を滲み出させる。

そんな彼女が奈美の回りをゆっくりと回り始める。

たまに腰回りに手を寄せたり、遠くから眺めたりしながら。

まるで店頭に置かれた花にでもなったかのようだ。

奈美の周りをぐるりと一周終えるととても真剣な顔で奈美の目を見据える。

「奈美様……タキシード着せてもいいかしら？」

「え？」

「祥子さん…今日はちょっと……」

「響さん、いけません？とても似合うと思いますのに…」

「祥子さんあの…急いで貰っていいですか？」

「まぁしょうがないわねぇ。では奈美様奥のお部屋へ」

促したまま歩きだす彼女と響を見比べているといつのまにか彼女が奈美の手を取る。

店の奥へ奥へと。

響の姿が見えなくなり仕方なく行く先を見定める。

連れていかれた部屋には色とりどりのドレス。

「奈美さん好きな色はあって？」

「…水色――」
「水色…ふふ、確かに似合いそう」
彼女は居並ぶドレスを一つずつ掴むとデザインを確認していく。
「颯…奈美さんですよね？」
「はい」
「ふふ、あの小さかった貴方がこんな素敵な女性になるのだから、私が歳を取ったわけだわ」
ドレスを選ぶのを止めもせずに彼女はそんなことを言う。
「覚えていて？真也（シンヤ）様と小さい頃はよくいらしていたのだけど」
真也とは祖父の名前だ。
確かに小さい時は事あるごとにドレスを選びに出掛けていた気がする。
「あ、コレがいいわ」
彼女の手にあったのは身体の線がハッキリ出てしまうであろう、肩の出るデザインの一着だ。
フリルは多くはなくシンプルと言えるものではあったけれど。
抗議の声を上げようとした奈美だったが、上機嫌で振り返った彼女の目を見て抵抗する気をなくす。
諦めにも似た心地で、奈美はされるがままに時を過ごすのだった。

第１８話　奈美の家柄（後書き）

奈美…なんでそうなったのでしょう？
作者も不明です（ д ；）
手のかかる子供達です・・・（ ＝ ＝）
そろそろ一回収集付けようかと模索中です。
感想メッセージ栄養になりますｍ（・ ― ・）ｍ

第１９話　長い夜の始まり（前書き）

展開が早いかな？とは思いますが…付き合ってくださると嬉しいですｍ（．．｜．）ｍ

第１９話　長い夜の始まり

「そろそろ説明してくれない？」

水色のドレスを着こなし、長い髪を弄びながら、奈美は未だ何も語らず運転をしている響を見つめる。
その首元と手首には控え目だが凛とした輝きを放つアクセサリーが光る。

「パーティーに行くんだ。我が家主催のね」
「なんかあるの？」
「ま、その辺りは行ってのお楽しみだな。奈美は俺か兄貴がエスコートすっから」
「――…そぅ」

パーティーと言われてもイマイチピンと来ない。
だからなのか目的地を聞いてしまった後は糸の切れた人形のように過ぎ去っていくネオンを見つめていた。
車が停止し、ドアを開かれるまで。

「どうぞ」

ドアを開けた響は片手を優雅に奈美に差し出す。
奈美は何を考えることもなく、差し出された手に片手を軽く添えるとスッと立ち上がる。
小さい頃この世界にいたからこそ出来る自然さで。
長く綺麗な髪だからと――今は付け毛だけど――束ねることなく下ろしたままの髪がフワリと広がる。

ただでさえ主催者側である響の登場は場を賑わすのに、そんな彼が見たこともない美女を連れていては人目を引くのはもはや当然だろう。
響はそのまま奈美の手を動かし腕を組むと、にこやかに微笑みあいながら二人は玄関をくぐっていく。
奈美にその自覚はないだろうが、彼女の容姿は人目を引いていた。着飾る事をしない時もある程度人目を引くのに、そんな彼女が着飾った時、人目をひかないはずがなかった。

「奈美――我が家へようこそ」

玄関先にはもう一人の主催者である奏司が奈美を出迎える。
長男であるという理由から自ら奈美を迎えにいけなかった事を若干悔しく思っている事など奈美が知るはずもないが、奏司が差し出した手に躊躇なく響の腕を放したことにそれも消える。
気付けば片手ずつ両側からエスコートされる形になる。
パーティー会場に着いた3人が人々の注目を一身に受けた事は言うまでもない。

まだ夜は始まったばかり……。

第１９話　長い夜の始まり（後書き）

更新頻度が早いのはノリノリの証です♪読み返して３つぐらい矛盾を作ってしまったらしく…修正せずに済むように画策中です♪

「ここだっ！」と見つけた方は御一報下さい♪

感想・メッセージ栄養になります。

第２０話　翔（カケル）

「二人とも私に構ってばっかでいいの？」

両側から飲み物や食べ物を手渡されながら、奈美はふとした疑問を口にする。

小さい頃に行ったパーティーでは必ずといっていいほど主催者側が挨拶回りをしていたからだ。

「っても一人にはしとけな…」

「私もう大人だよ？別に平気だから義務果たしてきなよ」

「そういうことなら兄貴行くぞ～」

「ホントに平気か？」

「平気だってば」

ヒラヒラと手を振ると渋々と言った感じで奏司は人込みの中に消えていく。

響は私の家柄を知っているからか特に不安には思っていないようで奏司を引っ張って行く。

そんな二人を見送ると壁側へと歩みを進める。

壁に背中をつけつつワインを片手に会場を見渡す。

至る所できらびやかな装いの男女が集まって話に花を咲かせている。

会場を見渡すと奈美のいる場所から少し行った所にバルコニーがある事を発見する。

二人が傍から居なくなっても特に困らない自信はあったものの、手持ち無沙汰でやることがないというのも暇なので、バルコニーに出て月でも見ようかと壁から背を離した時、右側に人の気配を感じる。

「お一人ですか？」

振り返った奈美に向かってそう問い掛けたのは懐かしい顔。

「翔（カケル）！！！」

「覚えていてくれて嬉しいよ、奈美」

家族ぐるみで仲の良い幼馴染みとでもいうだろう、この世界から離れた時から滅多に会うことのなかった友人――咲那翔（サクナ カケル）――だった。

第２０話　翔（カケル）（後書き）

さて…気の向くまま何人登場するんでしょう？？？（・_・？）
ってかお前誰だよとか書いてて思ったのは作者自身……。
近いうちの収集は厳しくなったか？？と自分の力量を試されている
っていうか……もう暴走ですね（・・；）
まぁだからこそ更新が早いような感じなので許して頂けると嬉しい
です。
次回もどうなることやら・・・（＝　＝）
二人の恋はいつ動くのでしょう？どんでん返し有り？（。д。；）
気ままに付き合って頂けると嬉しいですｍ（__）ｍ
では、感想・評価・メッセージは私の活力になります！！

第２１話　握手（前書き）

ベタ……かなぁ？（作者独白

第２１話　握手

そよそよと頬を撫でる風。
バルコニーに出ただけでまるで境界線でも引かれているのかと思うぐらいに静かな世界が広がっていた。
その静寂の中、奈美はバルコニーの手摺りから外を眺め、翔は手摺りに寄り掛かっていた。

「ホント久しぶりだな。何年ぶりだ？」
「１１年ぐらいかな、多分」
「もうそんなに経つのか～。そいや今日はどうしたんだ？おじさん達に相変わらず参加しないと聞いてたんだが」
「ん～ちょっとね。連れて来られちゃった」

（状況的には嵌められたに近いのだから『強引に』という形容詞が付くかもしれないし。まさか家柄がバレているとは思わなかったし）
奈美が胸中で独白をしている最中、隣の翔が複雑な顔をしていることに奈美が気付くはずもなかった。

「俺が何度催促しても足を運ばなかったのに？」

独占欲というのだろうか？
自分は無理だったのに他の奴には出来たということへの苛立ち。
そんな翔の心情を知ってか知らずか、奈美はなんて事もないように翔を見返していた。

「翔は翔だから」

その言葉には翔に対する信頼が伺える。
けれど翔はそうは受け取らなかったようだった。
奈美とは逆を向いているために奈美にはわからないが、唇を固く噛み締めている。
切れるのではないかというほど強く。
その目は悔しそうに閉じられている。

「ねぇ翔？」
「……」

奈美は返事のない翔をチラリと盗み見る。
話を聞いている事がわかると気にする事なく言葉を紡ぐ。

「――近いうちに…近いうちに私は……」
「奈美っ！！」

奈美の言葉は静寂を破って響いた声に掻き消される。
同時にこの時聞けなかった奈美の言葉が、翔に多大な衝撃を与える内容であることを翔が知る機会もまた先延ばしにされたのだ。

「え？響？」

駆け寄ってくるのは今日ここに連れて来た張本人。
奈美の横に立つ翔を見て不快そうに眉を寄せたのも一瞬の事で、この薄暗い中二人が気付くはずもない。

「ったく、中にいなくて探したんだぜ？」
「あーごめん、熱気に当たっちゃってさ」
「ま、見付かったからいいさ。兄貴よりも先に見つけられたし～」

響は今にも奈美に抱き着かんばかりの調子だ。
そんな突然降って湧いた男の顔を目を凝らして識別した翔の顔が驚愕に変わる。

「紫來(シライ)…響――？奈美…なんで…」

『知ってるんだ――？』という言葉は言葉として発音されることなかった。
奈美はそんな翔を一瞥するとすんなりと状況を飲み込む。

「あ、そっか。翔は響の事知ってるんだよね。響っていうか奏司とはちょっとした繋がりなの」
「俺はおまけかよ」

すかさず響の突っ込みが入り、同時に響は拗ねたように顔をしかめる。

「紫來奏司とも…知り合い？」
「まぁそんなトコ」

翔がそれほどまでに驚愕している理由に見当が付かない奈美は、やはりこの世界から暫く離れているからだろうか。

「奈美、逆に俺に紹介してくれない？」
「え？あー、ごめん。こちら咲那家長男の咲那翔。私とは幼馴染みみたいなものなの」

奈美が一歩後ろにいる翔をそう紹介すると、翔は一歩前に出て会釈を交わす。

「紹介頂いた咲那翔です。本日はこのような――」
「あ～堅苦しい挨拶はいいや。知ってると思うけど紫來家次男の響。よろしく」

形式張った挨拶を始めた翔を軽く制して簡略化し過ぎているであろう挨拶を響が口早に行い、翔に対して右手を差し出す。
真面目な翔はその態度に一瞬眉をしかめたが差し出された手を握り挨拶を交わす。
二人の間に流れる雰囲気は決して友好的ではない。
いうならば友好的な態度を取りながらお互いを牽制しあっているといった感じだろうか。
刹那絡み合った視線は次の瞬間には霧散する。
再び静かになったバルコニーに風に乗って音楽が聞こえてくる。

「あ、音楽…」
「あ～、始まったか」
「何が？」
「ダンス」
「あーダンスかぁ」
「よし！奈美踊ろうぜ」
「え？」

そう言って強引に奈美の手を引っ張っていく響は気付かない。
奈美の顔が微妙に引き攣っていることに。
先手を打ったはずの翔が引き止めることもなく二人を見送っていることに――。

第２１話　握手（後書き）

やっとこさ奏司と響の苗字が日の出を見ましたっ！
って言っても当初決めた大まかな設定書いたデータを無くしたので急遽あんな苗字に（笑）
当初は結構ありきたりな苗字だった気がするんだけどね（笑）
書いてるうちに段々設定と伏線が増えてしまうのが私の悪い癖です（・・；）
収拾しないと厳しくなりそぉ～（＝＿＝；）
途中で中断とかしないように頑張って書ききろうと思います（@＿@。
では。
感想・メッセージ・評価が私の活力になりますｍ（．＿．）ｍ

第２２話　ダンス（前書き）

サブタイトルを第〇話だけじゃなくしてみました。見難いですもんね。ってか、作者が覚えてられないだけですが（笑）ではご報告だけです。本編をどうぞ。

第２２話　ダンス

「私と一曲ご一緒頂けますか？」

手を差し出した張本人はにこやかに微笑んでいる。
けれど。

「奏司…嫌がらせ？」

このタイミングでダンスに誘うなんてそれ以外には考えないだろう。
無理矢理と響にダンスの相手をさせられた一曲がやっと終わったのだ。
５分程度の一曲を踊り切るのに何度響の足を踏んだだろう。
小さい頃からダンスだけはどんなに頑張っても上達しない。
リズム感がないわけではないと思うのだが…どうにも――。

「ぷ（笑）嫌がらせならわざわざしないって。どっちかっていうと名誉挽回だな」

そう言い奈美の手を取ると奈美をダンススペースへと導いていく。
奏司に道を譲るように自然に道が空いていく。
奈美でも気付くぐらい奏司に注がれる羨望の視線。
隣に立つ彼を見上げると思っていたよりも長い睫毛が目に入る。

（綺麗な顔してるよなぁ）

きめ細かい肌。
理知的な切れ長の瞳。
引き締まった顎のライン。

ベタ塗りしたような黒髪。
暫く奏司の横顔を観察していると、奈美が彼を見上げたことに気付いたのだろう。
一歩後ろを歩いていた奈美を振り返り、二人の視線が絡まると奏司が微笑む。
あの魅力的な笑みで。

「――恥かいても知らないからねっ…」

顔が赤くなっただろう自覚があった。
奈美は顔を見られたくなくて奏司の一歩前を歩いていく。
奏司の為に開けられたであろう中央のスペースに着くと同時に曲が流れ始める。
余り耳にしない曲だがそのテンポからワルツである事が知れる。
奏司は極自然に奈美の身体を引き寄せ、二人の距離が縮まる。
その時奈美はというとステップを思い出すのに必死でずっと足元を見ていて奏司の視線には気付かない。
曲に合わせてステップを始めるが余程心配なのか足元から目を離せないでいる。
そんな奈美と踊りながら意地悪そうにニタリと笑った顔は一瞬の事。
必要以上に奈美を抱き寄せその耳元に唇を寄せる。
その状態でもまだ顔を上げない奈美は余程ステップに集中しているんだろう。
そんな奈美に奏司の悪戯心はムクムクと大きくなる。
機会を伺うかのようにそのままでいた奏司は人と人の影に隠れた一瞬にそれを決行する。

「奈美」

と耳元で囁かれるのと同時に耳たぶを湿った何かが触れる。

その一瞬の感覚に奈美の身体が身震いをし、勢いよく顔を上げた。
奏司もすぐに体制を正し何気ない顔で奈美の視線と絡ませる。
見上げてくる奈美の顔はごまかせないぐらい真っ赤に染まっていて、
その口はパクパクと陸に上げられた魚のように開閉を繰り返している。
あまりの出来事に何かをいいたくても言葉がまとまってくれないのだろう。
そんな奈美を満足気に見ながら、再び顔を寄せる。
ビクリと奈美の身体が強張ったように震える。

「俺に合わせときゃいい。足踏まれるぐらいなんともないからさ」

軽やかなステップは幼い頃から踊っていたその証なのだろう。
奏司の顔には自信が満ちていて、その優しい目が奈美を見つめている。
奏司のリードはとても上手いのだろう。
身体をそのまま奏司に任せるだけでダンスになってしまうのだから。
3拍子のリズムが軽やかに響き渡る。
お互いの顔を見つめる形で踊る何組ものカップルが小声で何か話している。
ここも例外ではなく。

「ど？楽しいだろ？」

しゃべっていても十分に踊れるのだろう。
何もしていないかのようにそう声をかけてくる。
そんな奏司を奈美は疎ましく見上げるが、その目はじっと奏司を見つめている。

「楽しいだろ？」

「…うん」

再度聞かれた問いに渋々答える。
悔しいことに確かに楽しいのだからしょうがない。
足を一度も踏むことなく…というのはさすがに無理だったが、それでもその回数が激減しているのは確かなのだから。
ハイヒールがやや高い音を3拍子のリズムで奏でていく。
それは幼い頃に聞かされた昔話を思い出し、どこか気恥ずかしい。

「どした？」
「ううん。なんでもない」

考えていることが顔に出ていたのかも知れない。
そう思うと余計に顔が赤くなるのだが…それは不可抗力というものだろう。
鳴り止まない音楽――。
普段なら絶対に楽しむことの出来ないその時間を、奈美は今までにないぐらい楽しんだのだった。

第２２話　ダンス（後書き）

ダンス。
もちろんしたことありませんw
こんな所に招待されたこともあるわけがないwww
ってことで作者の妄想で埋まっています。
ちょっと奏司がエロかったですよね。
すいません。
なんかちょっと…あんな場面が書きたかったのです。
【余り耳にしない曲】ってどんな曲でしょうね??
誰か知っていたら教えてください（^__^・）
ではこの辺りで。
感想、メッセージ、評価は活力になります。

第２３話　叔母（前書き）

危ない危ない。
一週間経ってしまう所でした（・・・；）

第２３話　叔母

「奈美さん」

呼ばれて振り向いた先にいたのは濃緑のドレスを身に纏った女性の温かい眼差し。

「叔母さま！」
「白泉（シライズミ）夫人？」

奈美が声を張り上げるのと奏司が不思議そうに夫人の名前を呼んだのはほぼ同時だった。
駆け寄る奈美と立ち尽くす奏司は対象的であったけど。

「お久しぶりです！」
「ホントよ～あの後一度も顔見せに来ないんだもの。綺麗になっちゃって♪」
「ちょっと思うこともあって…」
「まぁいいわ♪でもいつから？またこういう場で貴方に会えるなんて」
「今日たまたまですよ。叔母さまもご存知でしょ？紫來奏司。今日は彼と次男の響に連れて来られたのよ」

急な自分の紹介に驚くものの奏司は優雅に一歩歩み出る。

「紹介頂きました奏司です」
「ふふ、知ってるわ。有名ですもの」
「有名になった覚えはないんですけどね。それより奈美さんが夫人

の血縁ということに驚いていますよ」
「あら？ご承知の上ではなかったのね。奈美さんは教えていないのね。彼女は颯家の長女よ」
数秒、時が止まったかのように奏司は動かなくなる。
「――え？」
彼の中で時が動き出した時に出たのは彼らしくもないとても間抜けな声。
「――別に隠してたわけじゃ…響は知ってたし…」
多分響は話を合わせてくれるであろうと想定した上でそう口にするが、マジマジと奈美を見る奏司の視線を受け止めるには良心が痛むのか奈美は顔を背ける。
「――それについては後でゆっくり奈美さんに伺う事にしますよ」
「あら？あまり虐めないで下さいね」
口ではそういいながらも、夫人の顔は悪戯が成功した子供のように楽しげで――奈美は人知れず溜息をつくのだった。

第２４話　空白の時間に

――『何故こんな事になっているんだろう』――と、もう何度思ったか知れない疑問を奈美は浮かべた。
仰向けに寝転がるのは普通サイズではないだろう大きなベッドの上。
もっと可笑しいのはそんな奈美の顔の横に縫い付けられた自分の手首。
そしてそんな奈美に覆いかぶさって奈美の目を見つめる奏司の姿。
緊迫した空気を肌に感じる。
奈美は思い出す。
『何を間違えたのだろう？』かと。
叔母と挨拶を交わした後の奏司には、今ほどの緊張感はなかった。
その後両親にも挨拶しとくといって奏司とは別れた。
そしてその後合流した時には何故かピリピリした空気で、真っ直ぐにこの部屋まで連れて来られた。
多分彼の自室だった部屋だろう。
数回行った奏司の部屋と同じ淡い緑で統一されているから。

「あいつ――誰？」

数分ぶりに聞いた彼の声は今までにないほど不機嫌そうだったが、
それを知っていながらも奈美は眉根を寄せる。
誰の事を言っているのか見当がつかないからだ。

「言えないような相手なんだ？」

沈黙をどう受け取ったのか、彼の声に異質なものが混じる。
この感情は苛立ちだろうか？
それとも悲しみだろうか？

奈美も昔に感じたことがあるはずなのに何故かその感情がなんだったのかは出てこない。
ただ一つ判別しがたい感情が彼を支配したであろう事は理解（ワカ）る。

「奏…――っ！」

名を呼びかけたその口を荒々しく塞がれる。
今までに何回かされてしまった優しいキスではない。
こちらの気持ちは無視したであろう乱暴なそれに恐怖が浮かぶ。
ビクリと一度大きく奈美が震えたことに奏司は気付いただろう。
けれどそれでも奏司が塞いだ口を開放することはなかった。
払いのけようと腕に力を入れるが、体重をかけて押さえられた腕が自由に動く訳もななく、奈美は早々に諦めざるを得なくなった。
そのままどれくらいの時が経っただろう。
５分にも１０分にも感じたが実際はとても短いのだろうとこんな状況でも冷静でいられる頭の片隅で考える。
少しずつ少しずつ腕を押さえる力は弱まり、今では力を入れれば簡単に払いのけることが出来る。
けれど奈美はそれをしなかった――否、出来なかった。
気付いてしまったから。

（あーそうだったんだ）

頭に浮かんだ一つの結論に至るのと同時にあれほど感じていた恐怖が霞みのように消えていく。
奏司から痛いほど感じていた感情。
それは――焦り――だったんだと理解したから。
あれだけ切羽詰まっていたのも、奏司を焦らせる何かがあったのだろう。
それが何だったのか思い付くものはなかったけれど。

「……」

耳元で何か囁くと奏司はゆっくりと身体を離した。
囁いた声は諦めたような悲しみが込められて聞こえた。
――『ゴメン』――と。
その一言でしかない言葉はとても深々と奈美の心に突き刺さった。
別れの象徴のように聞こえたから――。
背を向けた奏司の姿がなんだかとても小さく見える。
それは――無意識の行動だった。
その悲しげな後ろ姿を抱きしめた事は――。
触れた瞬間に奏司の身体がビクリと震える。
それをあやすように頭を撫でる。
奏司の目に涙はなかったけれど…彼は泣いていたんだと思う。
その理由(ワケ)を奈美は知らなかったけれど…。
悲しいような、それでいてとても優しいような……そんな雰囲気がこの部屋を満たしていた――。

第２４話　空白の時間に（後書き）

急展開っす！！
急展開っすよ！！（キャラ違っ
なんでこうなったんか――聞いてみょーじゃねぇですかっ（お
奏ちゃーん！！！

奏司「――――…」

（奏司登場！しかしダンマリ）

作者「うっわーテンション低過ぎっ」
奏司「――…お前が高過ぎるだけだから（怒」
作者「あり？額に血管が…何怒っとるんょ☆いやぁーしかし今回は
思いがけず急展開しましたねー」
奏司「――――――（怒」
作者「――――――……ヒッ」

（奏司の目が憎しみが篭られたように作者に向けられ――作者よう
やっと事態の深刻さに気付く）

作者「ご、ごめん――」
奏司「――謝って済むなら犯罪は起こんねぇよ…」
「――――っ！？」

（作者の背中を冷や汗が流れる）

奏司「――――」
作者「――――」

（蛇に睨まれた蛙に成り下がる作者――）

「――…まぁ皆様次も読みに来て下さいまし～」

（作者逃亡を計る――が照明の落ちた部屋からは不気味な音が鳴り続けていた――）

声も出せない作者に変わりまして……、『感想・メッセージ・評価頂けたら今以上に頑張ります』――だそうです。

ではまた後日。

第２５話　大切な人（前書き）

遅くなってしまい申し訳ありませんm（_ _;）m

第２５話　大切な人

ポツリポツリと奈美に抱きしめられたまま、奏司は話始めた。
失恋の事――。
今の事――。
どうやら両親に顔見せに行った時、従兄弟に挨拶として頬にキスされた所を見ていて不安になったんだと話してくれた。
追い詰められていたんだと思う。
そしてきっと彼を追い詰めたのは他でもない自分自身だろう。
奏司が話している間、奈美はずっと静かに彼の話を聞いていた。
アンティークの時計が刻むチクタクという音が静かな部屋に響き渡り、時の流れを感じさせる。
謝罪の言葉を何度も何度も彼は紡ぐ。
謝らなければいけないのは彼ではないのに…。
話の後も譫言のように謝り続ける彼を止めたくて、俯く彼の顔を上げさせて優しいキスをする。

「――――――っ！」

途端に見開かれた彼の瞳を奈美はしっかりと見つめ返す。
自分の中にある『想い』が溢れるような感覚。
頭の中は真っ白。
その中にただ一つ――浮かぶ言葉――。
彼の耳元でその言葉を紡ぐ。
他の誰でもなく、彼だけに伝えたい言葉――。
彼の顔が驚いたようにまたもや見開かれる。
そんな彼に奈美も話始めた。
告白された時の事――。
臆病になってた事――。

そして今の気持ち――。
言葉にすることが躊躇われる事もなかったとは言わない。
でも――隠したくなかった。
誤解してほしくなかった。
こんなにも辛そうな顔をさせたくなかった。
奈美がそうしたように奏司も静かに話を聞いていた。
いつの間にか入れ代わった体勢。
奏司は奈美を包み込むような形で抱きしめていた。
すべてを話終わった後にそうなったのは自然な事だったのかもしれない。
この日二人はお互いに大切な存在となったのだった――。

第２５話　大切な人（後書き）

なんだろコレ（＊＾ー ェ ー）
なんだかちょっと呆気なさ過ぎたかなぁ？？
でも最後は彼等にはあまり語って欲しくはなかったんですよー。何て言うか…やっぱり告白内容を知るのは当人達だけでいいじゃん？（笑）
奈美が何を言ったか、奏司の失恋はどんなものだったのか――それらは続編で明らかになります（多分…きっと…（・・；））
まぁ続編と言ってもこのままここで書くと思いますが（笑）
ではまた。後暫くお付き合い下さいｍ（゜―゜）ｍ
感想・メッセージ・評価を頂くと１．５倍で頑張れます♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5703b/

言の葉〜込められた想い〜

2010年11月28日05時56分発行